平成十五年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

目　次

講評・その他　一般科目　国語科教官　相本　正吾　2

入選　第一位　『僕の生きる道』を読んで　電気電子工学科　二年　阿部ひろみ　3

入選　第二位　『異邦人』を読んで　電気電子工学科　三年　石崎　雄介　4

入選　第三位　『老人と海』を読んで　土木工学科　二年　秋吉　大輔　5

佳作　人生―『エミリーへの手紙』を読んで　電気電子工学科　一年　梅原　優志　6

〃　『五体不満足完全版』を読んで　電気電子工学科　一年　島田　直　7

〃　『天使になった男』を読んで　土木工学科　一年　三浦　華織　8

〃　『そして奇跡は起こった』を読んで　機械工学科　二年　小野　圭介　10

〃　『命』を読んで　制御情報工学科　三年　朝見　陽加　11

〃　『キノの旅』を読んで　制御情報工学科　三年　檜垣明日香　12

〃　『24人のビリー・ミリガン』を読んで　制御情報工学科　三年　柳迫　里佳　13

編集後記　学生図書委員長（制御情報工学科　五年）　若狭　晃司

校内読書感想文コンクール（平成十五年度）

講評・その他

一般科目　国語科教官
相本正吾

本年度は、国語科教官によって各クラスから選ばれた計二十五の優秀作に対して、教官の図書委員及び学生の図書委員による審査を経て、国語科教官の最終審査により、第一位～第三位と佳作七作の計十作が入賞作として選出されました。

栄えある第一位に輝いた阿部ひろみさん「『僕の生きる道』を読んで」は、本の内容をもう少し紹介して論じてほしかったという思いが残りますが、余命一年と宣告された教師（中村先生）の言葉に触れて阿部さんが回想して語る友人との交友の話は、学校に行きづらくなった友人が見せた挑戦する勇気とお互いから学び合う阿部さんの美しい友情によって、光っています。今を大事にして一歩一歩しっかりと足跡をつけていく生き方はその本の著者中村先生が私たちに残したメッセージそのものです。

第二位の石崎雄介君「『異邦人』を読んで」は、祖父の逝去の際における石崎君自身の独自の体験を交えつつ、自己の感情の動きにあくまで忠実であろうとして社会から断罪され排斥されてしまった主人公ムルソーのありように石崎君は思いを致して、社会の道徳や常識にそのまま従うことによって社会人として無難に認められている私たちの生のありようを逆に批判的に問い直そうとしています。考察のはての結論はどうあれ、この問題作のなかなか難しいテーマのありかを巧みにすくい上げて論じたユニークな感想文になっていると言えます。

第三位の秋吉大輔君「『老人と海』を読んで」は、漁師たる老人と巨大魚との大海での壮絶な格闘の始終がクローズアップされがちなヘミングウェイ作のこの有名な小説を、老人についてまわった一人の少年の老人への思い（信頼と慕い）、及び、老人の少年への思い（プライドとやさしさ）という面に注目して読み抜いた感想文になっています。そのユニークな視点と相俟って、文章がしっかりしているので、読みごたえがありました。

以上の上位入賞者に続いて佳作となった七つの作品――身内の生死の体験を通して命の尊厳について深く考察した朝見さんの作品、多重人格者の実話に触れてほんとうの自分ということに思いをはせた柳迫さんの作品、新しい視点で自分を見つめ直すことによって勇気ということを考えた三浦さんの作品、主人公を通して「キレイゴト」の是非について考えた檜垣さんの作品、乙武さんの話を通してバリアフリーについて考えた島田君の作品、孫に遺した手紙を通して人との親和と人への思いやりについて考えた梅原君の作品、遭難にあった南極横断探検隊たちの見事な生還の話を通して目標に向かってあきらめずに進んでいくことを学んだ小野君の作品、いずれも、読んだ本との対話を通して私たちにとって大事なことが深く考察され自分の言葉で表現されていて、上位三作品にまさるとも劣らぬ力作になっています。なお、朝見さんは、昨年度に引き続いての入賞となりました。

日本語の作文力をつけるためには、日頃、実地に文章を書く練習をして書き慣れることも大事でしょうが、一方で、日頃、地道に広く読書をすることが作文力向上に大いに助けになります。読書をすることによって、作文に使える語句や言い回しが豊富になるというだけでなく、読書を通していろんな物の考え方に接したり、物事を深く考えるようになり、その人の考え方や考えが深まっていきます。その結果、表現面だけでなく、内容面も立派な作文が書けるようになります。読書感想文コンクールの入賞者は、いずれも、そういった日頃からじっくり読書をしている人であり、その日頃の成果がそのまま感想文に現れています。次回の読書感想文コンクールでの入賞を期する人は、日頃の読書を心がけて、次回はその蓄積の成果で勝負をしてもらいたいと思います。本年度は四・五年生の自主的な投稿がほとんどなかったので、来年度は、四・五年生の積極的な投稿も期待したい。

入選第一位

『僕の生きる道』を読んで

電気電子工学科　二年
阿部　ひろみ

この物語は、無難に安定した将来を望み、今を犠牲にして過ごしていた中村という高校教師が、突然、余命一年と宣告されるところから始まります。初めは死ぬことへの恐怖から中村先生は自暴自棄に陥り自殺未遂をします。しかし、主治医に「君に死ぬ権利はない」と叱責（しっせき）され、それまでの自分の生き方を後悔し、残りの人生を大切に一生懸命生きた話です。中村先生は余命を知ってから死ぬまでの間、生徒達へ言い続けた言葉があります。『高校生である君たちが、今、歩いている道に、しっかりと足跡をつけてほしい』。この言葉で、生徒達は、それぞれの歩いている道に足跡をつけていきました。私は、ある友人と出会ったことで今を一生懸命生きる大切さを知りました。

私が、その友人と出会ったのは小学六年生の時でした。当時、私の通っていた小学校は全校でも児童が三十数名で年々減少していたため、特別に他の校区からでも条件をクリアしていれば通学できるという認定を受けていました。その認定を受けての初めての転校生がその友人でした。同い年の女の子だったので、仲良くなるのにそれ程時間はかかりませんでした。しかし、担任の先生から彼女が転校してきた理由を聞いて、私は彼女と少し距離を置くようになっていきました。彼女の転校理由―それは「いじめ」でした。そのことを聞いて二、三日して彼女は学校を休むようになりました。先生に話を聞くと、彼女は学校に来ようと毎日頑張っているけれど、朝になると熱が出て学校へくるのが難しいこと、そんな自分にイライラしていることを話してくれました。私は、それを聞いて、彼女が精神的にかなり追い詰められていたこと、熱があってきつい中、学校へ来ていたことを知りました。そして、その時私は彼女と正面から向き合おうと決めました。それから彼女が保健室登校を始めました。「少しずつでも学校に行きたい」という強い意志があったからできたのだと思います。熱があるのに学校へ来て、授業も受けていた彼女が使うエネルギーと神経はかなりのものだったと思います。それは小学生だった私にも分かる程でした。それでも卒業までの間、自分のペースで頑張っていました。中村先生が受験で焦る生徒達へ言った言葉の中に『あと一年しかないと思って何もしない人は、五年あっても十年あっても何もしないと思う』というのがあります。「今行かなければ一生行けなくなる」「学校へ行かなければ、それから先もずっと人と交われなくなる」彼女はこのことを感じ取っていたのだと思います。私は彼女に逃げない勇気を教わりました。

それから、私と彼女は同じ中学校に通いました。知り合いの多い地元の中学校ではなく、私達の入学した知らない人だらけの中学校に彼女は入学したのです。一、二年は違うクラスで会う機会がありませんでした。けれど、三年になって同じクラスになりました。しかし、教室に彼女が入ってくることは数える程しかありませんでした。私でも知らない人の輪に入るのは勇気のいることです。彼女にとってはもっと勇気のいることだったと思います。彼女は教室に入る時、いつも視線を気にしていました。そんな彼女が弁論大会に出場した話を聞きました。初めはみんな耳を疑いました。人の視線を気にしていた彼女が自ら人の視線を浴びる弁論に挑戦したと聞いたからです。私は彼女の勇気に驚いたのと同じに彼女の勇気には勝てないと実感しました。私は彼女に挑戦する勇気も教わりました。そして、そんな彼女は私達と一緒に受験もして見事高校に合格しました。彼女と過ごした四年間に、私はたくさんのことを教わりました。中村先生の言葉にあった『今、歩いている道にしっかりと足跡をつけてほしい』。昔の私だったら、この言葉を受け止められなかったと思います。でも、中村先生と彼女の生き方を知って受け止めることができた気がします。私の歩いている道が、どこまで続いているかは分かりませんが、歩いてきた道が後からで

も分かるように、一歩一歩しっかりと足跡をつけたいと思いました。

入選第二位

『異邦人』を読んで

電気電子工学科　三年
石崎雄介

八月二十五日、祖父が死んだ。自分にとっては初めての身内の死だった。いずれは皆こうなるのだと思えば、あまりショックでもなかった。しかし、その夜は眠れなかった。次の日私はいつも通りバイトにいった。眠らなかった割に、気持ちはすごく興奮していた。そしてバイトが終わり自転車に乗ると、突然気分が悪くなってきた。息が上がってしまい、めまいがした。なんとなくこのままだったらヤバそうだったので、家に帰った後に、病院に行った。病院で祖父が死んだことを話すと、「精神的なものでしょう。」と言われて鎮静剤をうたれた。

次の日、祖父の火葬が行なわれたが、火葬場へ私は行けなかった。祖母に「どうして死に顔を見なかった、すっかりやせていたのだよ。」と言われた。私は「気分が悪かった。」と答えた。その後、葬式に参加した多くの人に同じ質問をされたが、同じように答えた。「雄介に来てもらえなくて、じいさんあの世で泣いているかもなぁ。」皆そんなことを言っていた。葬式の最中に初めて祖父が七十二歳になっていたことを知った。私は祖父が大好きであった。

私とムルソーは似ている。身内の死に対し悲しむ様子を見せなかったとか、そういうことではなく、無意味だと思うことから生まれる周囲との誤差を、うまく処理していけないところが似ていると思った。しかし一方で、私とムルソーは正反対にも思えた。彼は自分が世間の人と変わらないのだということを伝えようと努力する。しかし、ひとつとして嘘はつかないのだ。私はムルソーのそんな様子を見て、「ああ、この人は本当のことをいう、そして、何も知らない。」と胸を痛めた。もし私がムルソーで、あの蒸された法廷に立たされたなら、私は建前という便利なものを使って、自己弁護をするだろう。道徳的で、常識に沿った言葉で自分の罪を後悔するのだ。そしてそれが表面上のものとならないように、自分は今までそうして生きてきたのだと自分に思い込ませる。ここまでが済めば、あとは自然にそういう人間の言葉が出てくる。後半で、ムルソーがあまりに自分に不利な発言をするので、他の弁護士がまるで彼になったかのように、一人称で弁護を始める場面があるのだが、全く私のこの嘘のつき方と似ている。もしかしたらあの弁護士もまた、私と同じ誤差を嘘で埋めるものだと信じているのかもしれない。

そうして考えると、私にはムルソーが冷酷な殺人犯などでなく、生まれたての赤ん坊のような純真な存在に見える。私のような嘘つきには近寄れない、真理にくるまれた人のように感じるのだ。作中に「人生が生きるに値しない、ということは、誰でも知っている」という一文がある。私はこの一文に大きく頷きながら、自分の馬鹿さ加減に呆れた。ムルソーは他人と自分とでは何も変わらないということを示すために本当のことを話しているのだが、逆に私は他人と自分とは違うのだということを示すために嘘をついているのだ。結局私たちは似ているようで、本当は正反対なのだ。本当に裁かれるべきは、ムルソーではなく私だ、そう思った。

人殺しは確かに罪である。しかし、それが何だと言うのだろう。実際ムルソーの裁判の中で彼は人殺しの罪で裁かれたのではなく、母の死を悼まなかったという人でなしの罪によって裁かれている。私はこの本を読む前に、この本を読んだ人たちの感想を読んだ。皆一様に「不条理」という言葉を繰り返していた。しかし私には何も、不条理と思われるところはないように感じられた。道徳とか常識とかいう免罪符を手にした人たちが、たまたまそれを持たないムルソーという男を殺しただけだ。なぜ人を殺した。こう問われてムルソーは「それは太陽のせいだ」と答える。私はこの言葉にとても感動した。免罪符を手に生き

ている人に何を言おうと、結局は何も通じないのだ。彼自身は既に、自分の死刑執行を済ませている。それが、この本のどこに書かれているかと聞かれると少し困るが、ムルソーがアラビア人に向けて放った五発の銃弾のうち、アラビア人の死を確認して放った四発。あの四つの銃弾は、アラビア人ではなく、既に自分も死刑執行を待つ身であった事を知った彼が、彼自身へと放ったものではないか、と私は思う。この死刑囚め、ムルソーは最後に、司祭に向かってこう言い放つ。そして、この世に生きる全ての人が罪人であることを思うのだ。彼は自分の死刑執行の日に、自分が孤独を感じないように、見物人が憎悪の叫びでもって彼を迎えてくれることを期待する。この世の中の全ての人が罪人であることを、彼らの憎悪の叫びによって知られたのなら、ひとりぼっちで死んでいく彼の孤独感を消しさり、同時にこの世界に見切りをつけることにつながるからだ。そして私もいつか死刑執行の日を待つ、罪人の一人なのだ。

入選第三位

『老人と海』を読んで

土木工学科　二年
秋吉大輔

ふと手に取った本がこの『老人と海』だった。「老人」と「海」のどのような関係なのか気になってしまった。

老人の名前はサンチャゴ、四肢はやせこけて項（うなじ）には深いしわが刻みこまれ、頬には褐色の様なしみがあり、両手にはたくさんの傷がある漁師だ。想像しただけでたくましく力強い感じが文章から感じられた。

しかし、漁師（りょうし）にとって最悪の出来事、一匹も魚が釣れない時期が八十四日間も続いているのだ。釣を職としている人にとって魚が釣れないのは生活ができなくなってしまう程に大変な事だろう。

老人には一人少年がついてきていたが、こうも釣れないとなると少年の両親が少年を老人の舟じゃない別の舟に乗らせた。少年は、その舟での最初の一週間でみごとな魚を三匹も釣ったのだ。しかし少年は、そんな事より、慕っている老人の舟で大きな魚を釣りたかったのだと思う。その証拠に少年は、老人を毎日迎えに行き、空の舟を悔やみながらも老人の舟の片付けの手伝いをし、いつも老人を釣りに誘っていたのだ。しかし老人は、

「俺には運がない。だから一緒に行っても釣れない。」

といつも断っていた。そこには老人の意地と釣れない舟には乗せたくないという少年に対する優しさも感じられた。

そしてまた、寒い夜が明け、老人は今日こそは大物が釣れると信じ、広い海に小舟を出した。この時の老人の心境の中には、少年に今日こそ大物を釣り見せてやろうという気持ちもあったのではないかと思った。

そして老人は長年の経験から、空の鳥達を見て、今日は何かが違う事を、感じとっていた。

今日はいつもと違い、新鮮で良い餌魚（えさ）をつけた網をしかけた。その行いで、今日こそは釣るという気迫が感じられた。その思いがなぜ感じられるかというと、老人は顔や体はしわやひびわれがあるのに対し、目だけは昔のまま生気で満ちていたからだった。

そして、軍艦鳥という鳥が、上空で円を描く様に飛び、ねらいを定めて、急降下して、水中の飛魚（とびうお）をとらえたのだ。この部分は魚にとっては、空から矢が降ってきた様に感じ、気づいた時は鳥の胃の中で、というような一瞬の出来事だと想像できた。

水中の中では、鰹（しいら）が飛魚を追い回していたのだ。一匹くらい網にかかるだろうと老人は思ったがかからなかった。しかし、老人が諦（あきら）めかけたその時、網が引きを見せた。し

かし老人は、完全にかかってはいないと、ぐっとたぐりよせるのをこらえた。僕は素人だったらこの時点ですぐにたぐりよせるのにと、老人の経験の豊富さと勝負強さを感じとれた。

そして老人がぐっとこらえていると、先刻より強い引きが来て、老人はやっと完全にかかったと確信し、たぐりよせようとしたが、今度は、引きが強すぎて、網がどんどん水中に引き込まれた。老人が全力で引き上げようとしてもなかなか上がらず、長期戦の魚との闘いとなった。僕も釣りが好きだ。そこそこ形の良い魚を釣る時もある。しかし水中に竿などが持っていかれる事なんて、滅多にない。だから、この部分の文章では、老人の網には、とても大きな魚がついているか、よく水中で逃げ回るので強く引く魚がついているかだと思った。

僕の予想は、前者が正解だった。老人が魚と格闘していたら夜になったのだ。そして次の日になっても上がらない。その上魚の力が衰えなかったからだ。大きな魚は体力をそれほど使わなくても強い力を出せるからだ。

その次の日も、魚は逃げ回り、上がらなかった。老人は網を持つ手の力が失われかけたが頑張った。この部分では老人の真の強さが感じられ、心に響いた。

しかし、その次の日の夕方に、急に網が軽くなり魚が浮いてきた。その時、老人は初めて魚の正体を見たのだった。魚の正体は大きなカジキマグロ。どうりで引きが強いはずだと僕は納得した。

老人は釣り上げたはいいがあまりに大き過ぎて小舟に乗らないので小舟の横にくくりつけて、急いで帰ろうとした。この時の老人の心は、あの少年に見せてやろうとしている気持ち良い状態ではないかと僕は思った。

しかし、帰る途中でサメにカジキマグロが襲われ、カジキは残骸だけになってしまった。

港に着いたら、少年が待っていた。残骸だけのカジキだが大きさは見てとれ、少年は、前と変わらず、優しく老人を慕った。

この本は、老人の少年への思い、少年の老人への思いも含まれ、巨大魚との格闘が話の全てではないと感じました。そして、多くの想像をしやすいので読みやすい本だと僕は感じました。

佳作

人生―『エミリーへの手紙』を読んで

電気電子工学科　一年
梅原　優志

人生とは何なのか？僕は度々そう感じたことがありました。最近になっては、勉強とかばかりになって、人生つまらないものだなと思ったこともいくらかありました。人生とは何なのか？そう考えていたときに出会ったのが、『エミリーへの手紙』という一冊の本でした。

この本は、さまざまなところに感動する場面や共感できる場面がありましたが、その中でも特に心に残った場面がいくらかありました。

この本に出てくる人におじいさんがいます。そのおじいさんはエミリーという少女のおじいさんで、そのおじいさんは精神的な病気にかかっていました。それにもかかわらず、エミリーはそんなおじいさんと仲良くしていました。僕はそこのところで、エミリーはいいなあと思わず思いました。それはエミリーがおじいさんと仲良くできるからです。でも、僕にはとうてい無理だろうと思います。その理由は、中学二年生の課外授業での職業体験活動をしたときに老人ホームに行ったことからでした。老人ホームには、たくさんの老人がいました。そこで働いている係りの人から「声をあの人にかけてみて。」と言われたとき、僕はなかなか声をかけられませんでした。僕は元々人と話すことが得意ではなかったので、仕方がないとその時は思っていました。だからこの本を読んだとき、改めてこの事が思い出され、おじいさんと仲良くするエミリーがうらやましかったのです。

ところが、おじいさんは病気で亡くなってしまいます。そのおじいさんは、古い家と自

作の詩集を遺します。そしてその詩集には、秘密があり、それは暗号です。その暗号はおじいさんのパソコンのファイルを開けるキーワードとなっているのです。そのファイルの中は、あの大好きだったエミリーへの手紙が入っていたのです。ところで、エミリーの父親と母親は、離婚寸前のところまで来ており、最悪な関係でした。しかし、詩集のキーワードを見つけるや、謎解きのように解いていき、しだいに親が協力して解くことになります。そして最終的には、手紙をいくつも読んでいくうちに感動し、しだいに気持ちが変化して仲直りします。おじいさんが重い病気の中で死ぬ前に手紙を書くことがすばらしいと思います。その病気は、うつ病とか記憶を忘れやすくなった時には何が何だかわからなくなって暴れ出すことさえもある症状をおこしました。それでも手紙を書いたところに彼の精神力を感じました。でもやはり手紙を書けた理由としては、エミリーへの思いが誰よりも強かったからだと思います。手紙の力で仲良くなったところに、手紙のすばらしさを感じました。手紙は、口で言えないことでも、手紙に書いて相手に気持ちを伝えることのできるすばらしいものだと思っています。

いろいろとよい結果につながっていったものは、エミリーへあてた手紙でした。手紙には、自分の昔のさまざまな体験を語って、エミリーに人生について教えている内容なのです。なのになぜエミリーの両親も感動し、仲を良くすることができたのか？実は手紙の内容は、エミリーだけに向けたものではなく、エミリーの両親、つまりおじいさんの子どもにもあてた手紙だったのではと感じます。この手紙は、おじいさんの最後の仕事、つまり子どもや孫に自分の人生を伝えて学ばさせるという事を成しとげるために書かれたおじいさんの家族への最後の贈り物、僕はそのような気持ちでおじいさんが書いたものだと思っています。

これを読んで、人生について深く考えました。人と仲良くなる事、人への思いやりの心、それらがあってこそ人と人との関係が良くなる第一歩だと思いました。今までは、何げなく勉強したり家で遊んだりしてばかりでした。でもそれでは人とのかかわりが減ってしまいます。だから、身近な事でいいので、まずは誰かにかかわりをもとうと思います。例えば、自分の今まで言えなかった事を、手紙でも口でもよいので、とにかく人に伝えようと思います。それをすることで、自然に相手も同じような気持ちになるかもしれないし、それを伝える事で相手が、よき相談者にもなることさえあると思います。そこから自然に人と仲よくなる事、人への思いやりの心がある人へとなれると思います。

佳作

『五体不満足完全版』を読んで

電気電子工学科　一年
島田　直

乙武さんがうらやましかった。なぜなら、みんなに愛されているからだ。生まれてきた時、手と足がなかったらどうだろう。乙武さんの母は、「かわいい」と第一声をあげた。おそらく、一般の人々には泣く人やらショックで倒れることだってあるだろう。自分にしても我が子をうまく育てられるだろうかと思う前に心の奥底に閉じこもってなかなか立ち直れなくなるであろう。にもかかわらず乙武さんの母はと思うと、心が強いんだなぁと感心しました。

乙武さんの幼児期・小学校時代は特にうらやましかった。もちろん、両親の苦悩も大いにあったけれどそれ以上に乙武さんへの愛情が強かったに違いないと思う。また、乙武さんが幼児の時友達を作るにはとても難しいと思ったけれど彼はすごかった。さすがに幼児だから体の事をあまり気にしなかったのかも知れないが自分は彼の明るい性格がよかったのだと思う。もし、暗い性格だったらきっと仲間外れにされていただろうし、このまま大人になったらと想像すると最悪の事態になる

かもしれない。しかし、彼は友達の数が多くなった。つまり、人気者になったのだった。

そして小学校になるとやはり厳しい現実が待っていた。門前払いされてしまうのだ。それでもあきらめなかった彼の両親には並大抵の気持ちじゃなかった事はすぐわかるが、主観的に考えてみると事の大きさが全然違う。門前払いをくらう度、胸がいっぱいになるだろう。とてもじゃないけど耐えられない。最後にはあきらめかねない。なんとか受け入れてくれる学校が見つかった時はホッとした。

乙武さんの友達はみんな好きになった。訳は彼を障害者扱いにしなかったし、何より優しかったからだ。小学校時代は担任の先生のおかげが七割ぐらい占めていると思う。低・中学年の時の先生が印象強い。彼もまた乙武さんを気遣い、普通の人として見ていたのだ。まだ幼い彼を将来不自由がないようにしてきた時に、彼が辛くても心の中で応援していたのだろう。この結果、彼の友達やクラスメイトに影響したと納得ができる。

高学年になると先生が変わった。この先生は、クラスメイトとともに乙武さんが水泳記録大会に出られるように特注のビート板を作ってあげた。実際に泳いでいる姿を見たら自分は感動すると思う。現に見ていたおばさんも感動している。乙武さんは自分なりに泳いでいるのだが、見る人が見たら同情してしまう。

中学校になると彼は部活に入部した。それもバスケ部に。最終的には試合にも出た。自分はスポーツ部に彼が入るとは思わなかったので驚いた。彼自身幼い時から普通の人という意識があったが弱気な自分ならみんなの前でプレーする事を拒み、殻に閉じこもるでしょう。こんな彼は特訓の成果もあってかドリブルに磨きがかかりました。この時思ったのは人は努力すれば何でもできるということです。例え、それが障害者でも。

乙武さんを通して学んだことはたくさんあります。

まず、日本はまだ障害者に対しての設備が充分じゃない所があるということです。だからこそ、他人の助けが必要なのです。しかし、助け過ぎはいけないと思う。それは自分でできることがあるからです。このことを頭の中に入れておかなければその障害者にとって余計なお節介になったり、その障害者は甘えて何でも人の助けに頼りがちになります。

次に、障害者には自分の意志がちゃんとあることです。だから、簡単にあきらめさせるような言葉をかけたらその人は落ち込んでしまうと思う。そういう時は意志を聞いて、実際にやらせてみればいいんじゃないかと思う。

そして、障害者を普通の人と見ることです。障害をもつだけで嫌われたりするのはどうかと思う。これはあまりにもひどすぎます。また、かわいそうと思うのはあまりよくない。その人が事故が原因ならわかるけど、もしその人が障害について何とも思ってなかったら自分はかわいそうな人というので自信を失う可能性もあるからです。この本でアメリカは障害者に慣れていると知り、日本もいつかこんなふうになってほしいと思う。

今、少しずつバリアフリーが増えているが、それと同時に障害者と普通の人との心の境界線をなくしてほしい。

佳作

『天使になった男』を読んで

土木工学科　一年
三浦華織

今までと違う視点で自分のことを見つめ直すことの大切さを、かつて私は知らなかった。

違う視点で自分を見つめ直すことは意外に難しい。まず、冷静でなければならない。昔から急いては事を仕損じるというように、冷静な時には見えていたことが、そうでない時には見えなくなってしまうからだ。自分は自分で、それ以外の何物でもない。わかり切っている自分を把握し難い。多重人格でない限りは、自分の事を完全に他人事のように考えることはできないと思う。

冷静であることはできるかもしれない。しかし違う視点を持つことは難しい。でも持たなければ見つめ直すことはできない。同じ視

点で同じ物を見つめ直しても、結果はあまり変わらない。視野には限界があるからだ。

私にこのことを思い知らせた一冊の本がある。『天使になった男』という本だ。この物語の主人公ポールとかつての私は少し似ている。ポールも私も体裁ばかりを気にして恐怖心に飲み込まれそうになり、自らのことを見つめ直す勇気さえも失いかけていた。そして問題が起きれば、見つめ直すこともなくネガティブな発想の下に行動するので、全く悪い方へと向かっていくという、救いようのない悪循環に陥ってしまっていた。

しかし、私もポールもこの悪循環から抜けることができた。それはポールにとってはレイフとの出会いによってである。私にとってのレイフはこの本だ。ポールはレイフから、私はこの本から、恐怖心と勇気の話をきく。

「恐怖は反応で、勇気は決断だ。」

「恐怖は敵をつくり、勇気は友をつくる。」

このような、哲学的でありながら分かり易い言葉がたくさん出てくる。私のような人間でも納得してしまうようなすばらしいフレーズだ。今まで気がつかなかったことだが、言われてみればそうなのだ。かつての自分を振り返ってみると、いろいろな場面でハッとさせられる。まさに目から鱗(うろこ)が落ちるといった感じだ。

そこで初めて、自分が恐怖を抱いていたことを知った。今まで自分が抱いていた恐怖心の存在にすら気付かずにいた自分に呆れてしまった。と同時に気付かずにいた自分の甘さに恐怖を覚えた。恐怖心とは不思議なもので、その存在にすら気付かない比較的おとなしいものでありながら、それでいてその住処(すみか)となる人の心を飲んでいくのだ。そして最後にはその人を飲み込んでしまう。

私に足りないものは勇気だ。そして信じることだ。それに気付いたのはレイフの話を聞いたからだ。

「信じる心があれば、恐れるものなどなにもない。人生には意味があると信じ、そして自分の生きる目的を信じる。すると、恐怖はただの警告になる。まだ挑戦する準備ができていないと教えてくれるんだ。恐怖を支配すれば、それはきみの味方になる。」

レイフが最後にポールに伝えた言葉だ。私に恐れるものがあるのは信じる心がないからだ。信じることができないのは勇気が無いからだ。私もこれでようやく恐怖心とおさらばできると思った。それなのに……。

行き詰まってしまった。足りないものに気が付いたところで、私にはそれを補う術などなかった。勇気なんて見つからない。そもそもないんじゃないか、なんてあきらめかけていた。気が付けば、また信じられない私がいる。これでは、またかつての私に逆もどりしてしまう。

そのとき思いついたのが、違う視点で見つめなおすことだった。私なりにさんざん考えぬいた挙句の果てにひねり出した結論がこれだった。この文章の冒頭でも述べたように、違う視点を持つことは難しい。しかし、この本を読んで考え方が変わった今、やってみるだけの価値はあると思った。

振り返ってみて、同じ結論が出れば、それは自信につながる。自信があれば勇気も自然と湧いてくる。

やっと解決した。恐怖心に負けることのない日々をおくるには今までと違う視点で自分のことを見つめ直すことが大切だ。弱い自分が顔を見せはじめたら、いつも振り返って確かめればいい。たったこれだけのことなのに、この結論に到るまでにたくさんの時間を要したのには、もうただ笑うしかなかった。

ポールとレイフが「古い友人」になったように、私とこの本も「古い友人」になれるかもしれない。

佳作

『そして奇跡は起こった』を読んで

機械工学科　二年
小野圭介

僕はこの本を読み終わって学んだことは、努力をする大切さと最後まであきらめないということだった。

大英帝国南極横断探検隊、シャクルトン隊長を含めた二十八人は一九一四年十二月に南極大陸へ向けて出航した。航海は初めは順調だったが、二ヶ月後の一九四五年一月に南極大陸まであと一歩というところで氷塊（ひょうかい）に閉じこめられてしまう。そして十ヶ月後に船は氷の圧力によって破壊、その一ヶ月後に沈没してしまう。普通だったら船が破壊された時点で南極大陸はもちろん、生きて帰ることもあきらめてしまいそうだ。探検隊のメンバーの中にもあきらめた人もいると思う。僕がメンバーだったら確実にあきらめているだろう。しかし、シャクルトン隊長――ボスはあきらめなかった。そして出航から二年後、メンバーが一人も欠けることなく全員が生還した。

なぜ全員が生還できたのだろうか。それは初めはバラバラだった心を一つにし全員が、「生きよう」と努力したからだと僕は思う。船が沈没してから目指したのは、一番近い陸地のエレファント島だった。しかし、そこまでは氷の上を五百五十キロばかり荷物とボートを持って歩かなければならない。日本でいえば、だいたい東京から神戸までの距離だ。しかも氷の上といってもみわたす限り平らというわけではなく氷の山があちらこちらにできていて、三時間で一キロと少ししか進まないところだ。さらに場所は地球上で最も過酷といわれている南極だ。そんなのが耐えられるはずがない。そして船大工のマクニーシュは、「船が沈んだのでもう誰の命令にも従わない。」と言った。僕がその場にいたら、きっと「そんなやつは、ほっとけ。」などと言ってマクニーシュをおいて行ったと思う。しかし、ボスはそうしなかった。マクニーシュを説得し、また二十八人で進みだしたのだ。ボスは全員が団結しないと生きのびられないと思ったのだろう。その後もテントの中でケンカがおきないよう、まめにテントのメンバーを変えるなどの工夫をしてみんなの心を一つにしていった。そしてついにボートを海へ降すことができた。しかし、海は荒れくるいとてもボートなどで行けるものではなかった。その中をみんなが「助かろう」、「生きのびよう」と必死に耐えて、ついにエレファント島へ到着した。それまでの道のりは想像もつかないくらいきつかっただろうと思う。もし僕が探検隊のメンバーだったら「生きていてこんなつらい思いをするより、いっそのこと死んだ方がましだ。」と思って、「助かろう、生きのびよう」など思わず死んでしまうだろう。しかし、みんな生きのびた。なぜそこまで生きようとしたのか、それはボスがみんなを励まし、みんなが「この人についていけば生きのびれる。」という希望があったからだろう。エレファント島からサウスジョージア島に助けを求めて出発したときは、みんながボスを信じていないと四ヶ月も待っていられなかっただろう。逆にボスはみんなをなんとしてでも助けようとしたから、命をかけた行動ができたのだろう。こうしてシャクルトンたち二十八人はみんな助かった。

僕は、もう一度本を読み自分と比べてみた。僕は一応人並みに努力をしてきたつもりだった。しかし、よく考えてみると、その努力はどれも中途はんぱだったような気がする。シャクルトンたちはみんなが「生きる」という大きな目標に向かって、「生きたい」と強く願い、最後まであきらめなかったからあれほどの努力ができたのだと思う。その点僕は特に目標もなく、強く願ったわけでもなく、すぐあきらめていた。学習のことでいえば、ちょっとでも難しい問題があったり、テストで時間が無くなったりすると、すぐあきらめてしまう。だから努力が中途はんぱになったのだろう。もしかすると人並みの努力をしていたというのも自分の思い込みだったかもしれない。本当の努力というのは、大きくても小さくても目標を持ちそれに向かって何かを

することだと思った。
シャクルトンは一九二一年、隊員を集めて再び南極へむけて出航した。が、一九二二年一月五日、サウスジョージア島にて夢をかなえることなく息を引きとった。結局彼は計四回の南極探検を行ったが、一度も目的を達することができなかった。しかし、最後の航海は自分の命はもう長くないと知っていたのかもしれない。いや、知っていたに違いない。それでも彼は最後の最後まであきらめず南極大陸横断という目標に向かって進んでいった。
僕はこれからこの本で学んだことを生かそうと思う。そのためにまず、目標を持ちたい。そしてそれに向かって最後まであきらめず努力を続けたい。努力は奇跡も起こせるのだから……。

佳作

『命』を読んで

制御情報工学科　三年
朝見陽加

一体幾つの命が毎日この世に生まれ、そして毎日この世を去って行っているのだろうか。今というこの瞬間にも、どこか私の知らないところで、その命のサイクルは止まることなく繰り返されているのだろう。
そもそも生きるとは、命とは、何なのだろうか？私はこの本を通して、柳美里さんの過ごした時間を通して考えさせられた。
一人の女性があるとき一つの命をそのお腹に宿した。ここまではそう珍しくも驚くこともない。むしろ大変喜ばしいことであり、新しい家族の誕生に周りの人々は歓びの声をあげるだろう。しかし、この子の存在を、新しい命の誕生を、初めて知った作者は違っていた。この子が生まれて誰よりも最初に出会うであろう人「自分の母親」の心境は、喜びではなかった。即座に産むことを選択できない状況であった。作家である自分のこれから、やがては生まれてくるこの命の行く末が頭をよぎった。それ故であろう、彼女は何度も切迫流産を繰り返してしまった。
お腹のなかにいるときから、人は、自分がこの世に、少なくとも身近な人に必要とされている存在かどうかを感じとるらしい。感受性は幼い時ほど強く、同時にその危険性は高い。自分の存在が必要ないと感じた時、胎児は自らの命を絶つ。胎児も意思を持っているのである。誰に手を出されるわけでもない。感じた自分に対する周りの「存在価値」という評価一つだけだ。これは胎児に限ったことでもないが、大きな問題だと思う。母親の心理状況は、大変重要ということである。しかし、彼女は彼女をとり巻く様々な問題で既に精神的に余裕などなかった。その上この子には父親がいない。いないと言うより、父親たるべき男は、自分が父親だとその責任を負おうとしない。認知しないのである。自分自身の生活をたてるだけでも厳しい中、一人で育てなくてはいけないという肉体的・精神的苦痛は想像を超える。仕事をもつ者は皆こうだとか、自業自得だと言ってしまえばそうなのかもしれない。しかし私は同じ女性として、同じ「命」という「物」ではない生き物である証をもつ一人の人間として、彼女の置かれたこの状況に何とも言いがたい苛立ちを感じた。父親である彼は、彼女に対して、そして彼女のお腹で日々すくすくと育ちこの世への誕生の日を心待ちにしている新しい小さい命に対して、大変失礼だと。この子を我が子として認めないのは、同時に生まれてくる事を認めないことと同じである。花が咲く前の蕾をむしり取るように、自分の力で必死に生きようとする命をうばうことなど誰にも出来ないはずだと私は思う。神でもない限り。
彼女は自分自身とやがて生まれてくる我が子を抱えながら、同時に彼女にとって大きな存在である東の看病に付き合った。東とはお互いを支え合う関係であった。彼は全身のいたるところに癌が転移し、出来ることは全てやったが、どんな治療も一向に回復は見られない。逆にその副作用は強さを増し、髪は抜け落ち起き上がっていられる時間は日に日に少なくなっていった。それは死期の訪れを予感させる象徴であった。
こうして彼女のそばには、これから生まれ

ようとする新しい命と隣り合わせでこれから死に行こうとする命とがあった。どちらも自分にとって大切で、かけがえのないものである。その間に挟まれた彼女は、耐えがたい何かを感じていただろう。「この子が言葉を喋りだす、せめて三歳くらいまでは頑張るから。」と度々東は口にしていた。その言葉が彼女を逆に不安にさせたんじゃないだろうか。何の支えも無くして一人でこの子を守り抜いていかなければならなくなるという現実に。そして確実に近付いてきている孤独という苦しみに。

彼女の子はやがて生まれた。そして東はそのしばらく後にその命を終える。他者の死は自分の死より関係してくるとある人が言った。それは生まれてくることも。彼女にとって我が子の誕生と支えであった東の死はこれからの彼女の生活に当然のことだが、良くも悪くも大きく関係していくだろう。二つの命はただ「ある・ない」というような形的なものではない、もっと大きな枠組みでくくられたものであると思う。

生きるということ、死ぬということ、「命」とは……。一体何であろうか。いかなる意義を持つのであろうか。まだはっきりとその意味は私にはわからない。もしかしたら、死ぬまで、ずっとわからないかもしれない。しかし、私はこう考える。人は自分の為に生まれるわけでも生きるわけでも死ぬわけでもなく、誰かに何か影響を与えるために、存在するのではないかと。大切な人を得る・失う。一言で言ってしまえば簡単なことのように聞こえる。しかし、そこには大きな何かがあるし、その何かが私の、そして今日と言う日を、今と言う時間を動かしているように思う。

佳作

『キノの旅』を読んで

制御情報工学科　三年
檜垣　明日香

これは、人間キノと会話出来る乗り物エルメスが、共に旅をする話です。その中にある話で、キノは一組の旅する男女と出会います。その女は「人と人との争いはいけない。愛を持ってのみ解決に当たるべきだ。私も実践している、貴方もしてくれ」とキノに訴えます。しかし、女は知らないものの、共に旅をしている男は、女を守るために女に隠れて銃を撃っていました。男は女とは正反対に、「武力を持って解決に当たる」という考えを持っていました。キノは女の話を聞き流すが、男の考えには賛同し、いつものように別れます。

旅で一番気をつけなければならないことが「命を無くさないこと」と答えるキノにとって、愛がすべてと考える彼女の話は所詮、理想論でした。結局、「キレイゴト」でしかない理想は、そもそも「世界の人間全員が一つの考え方を持てる」という大前提が間違っていると考えました。それは現実を見据えない「キレイゴト」でしかありえません。だから、キノは話に耳を傾けるふりしかしなかったのだと思います。

所詮現実とかみ合わず、理想論や大人の偽善でしかない「キレイゴト」を非難する人は多いでしょう。何を隠そう、私自身がその「キレイゴト」を非難する一人です。

けれど私は、この話を読んだ後で、本当に「キレイゴト」を切り捨てていいのだろうかと、ふと疑問を覚えました。「キレイゴト」を切り捨ててしまえば、人間はただのエゴの固まりになってはしまわないでしょうか。

何も、大きな問題で考えなくても良いのです。日常生活における、ちょっとしたエゴを見たことが無い人はいないでしょう。それは例えば、ゴミのポイ捨てであったり、あるいは並んでいる列への割り込みであったりするかもしれません。ましてそれを、いい年をした大人が平然とやっている様は、見苦しい以外の何物でもありません。中には自分がしている、したことがある、という人もいるでしょう。私だって「自分は困らないからいいや」と思ったことが無いとは、口が裂けても言えません。しかし、「キレイゴト」と言い切り、当然のように自らのエゴを晒し、それで平然と他人に嫌なことを押し付けていいは

ずがありません。

主人公のキノは、理想論に真剣に耳を傾けたりはしませんでした。でも、キノは銃を撃つことを選ぶ一方で、命の大切さをきちんと理解しているように見えます。なぜなら、キノは旅の途中、命の危機に陥るなどしない限り、決して銃を撃たなかったからです。

話の中でキノと男が話しているように、私も身を守るのに必要があれば他人を排除してしまうでしょう。女が言う愛が全てを解決する、などという言葉は所詮理想論にしか過ぎないとやっぱり思います。私は死にたくないし、生きたいし、幸せになりたいと思わずにいられないからです。ですが、他人の迷惑を全く考えない人間にもなりたくないと思います。他人を排除することは、心底気持ちの良いこととも思えません。

近頃は、「キレイゴト」をやるのが「格好悪いこと」に見られる時すらあります。しかし、自分さえ良ければ良いなどというエゴを平然と実行してのけるぐらいなら、偽善者でもいいのではないかとすら思います。

もし「キレイゴト」を本当に偽善にしてしまい、良心と呼ばれるものが完全に無くなってしまえば、それは目も当てられない本当に汚い世の中になってしまうと思います。たとえそれが偽善や仮面に見えても、そこに少しでも本当の気持ちがあるなら、「キレイゴト」は多かれ少なかれ必要かつ価値あるものだと思います。

もちろん「キレイゴト」だけで人生は渡れないでしょう。しかし、キノのように、大事な事をきちんと分かっておけばいいと思います。キノは、誰かがしてくれると人任せにするでもなく、理想だけを言い募って現実を見ないでいるわけでもありません。私は、この本を読んで、他でもない自分が積極的に、現実を見据えて行動したいと思いました。また、より多くの皆がこの「キレイゴト」を本当に変えたならば、もしかしたら世界はもうちょっと住み良い世界になるのかもしれないと思いました。

佳作

『24人のビリー・ミリガン』を読んで

制御情報工学科　三年
柳　迫　里　佳

この本は、ひとりの人間の中に24人もの人格が存在するというビリー・ミリガンという男性の実話です。私が初めてこの話を知ったのは、あるテレビ番組で彼の事件が取り上げられているときでした。多重人格（現在の診断規準では解離性同一障害という）という言葉は知っているけれど、日常生活で出てくるものではないし、身近にそういった人がいるわけでもないので、馴染みのあるものではないと思います。しかし、そういった多重人格のケースを私自身が一度も見たことがないからこそ、私は彼の特集に見入ってしまいました。それを見るまで、私は彼のこと、事件のことも全然知らなかったので、彼の中に二十四人もの人格達が潜んでいるということに凄く驚きました。

偶然、文庫本を見つけ、読書感想文の課題にしようと決めたのですが、読み進めていくうちに段々と、なぜ彼の中に二十四人もの人格ができてしまったのか？ということがわかってきました。原因は、彼が幼少の頃、血のつながっていない父親から受けた虐待だそうです。それよりもっと小さい頃から彼には何人かの人格が潜んでいたらしいのですが、父親の虐待によって彼の心は二十四個に砕け散ってしまったようです。

ここ数年のうちに「虐待」という言葉をよく耳にするようになったと思います。とても悲しいことだと感じました。虐待を受けたことがない私が言うのは無責任なことかもしれないけれど、早く虐待という言葉を聞かなくていいような社会になってほしいし、虐待を受けた人達の心の傷が少しでも癒されることを願っています。

ビリーの物語を読んでいて、彼のように凄まじいものではないけれど、自分の中にいる別の自分の存在というものを考えることがありました。現代社会で生活している人間は多

くの顔を持って生きることを迫られていて、どれが「本当の自分」でどれが「ニセモノの自分」なのかを自ら区別することさえ難しいのではないでしょうか。私は日頃、一日の大半を学校で過ごしていますが、その間に関わる人々、先生・友人・先輩・後輩などのうち、どれだけの人に「本当の自分」というものを見せているのでしょうか。殆んど見せてなどいないかもしれません。正直なところ、自分でも「本当の自分」がどういうものなのか、よくわかっていないと思います。

では「本当の自分」とは一体何なのか？この本を読み、考えて、最終的に行き着く疑問はこれだと思います。わかっているようで、実はよくわかっていない、しかし、よく見据えていないといけないことではないでしょうか。簡単に「本当の自分は〇〇だ。」と言うわけにはいかないけれど、じっくりと自分自身を吟味することが重要なのではないでしょうか。

ビリーの体験を自分自身の問題として受けとめた読者がたくさんいたようです。私もその内の一人ですが、ビリーというたった一人の人間によって、多くの人が「私って誰？。」と自分の心の内側を考えるきっかけを与えてくれたということは、やはり覚えておくべきだと思いました。

物語の中には、彼の分裂してしまった人格達を一つに統合しようと、ビリーを信じて治療に取り組んだ精神科医、スタッフ、弁護士達がいました。彼らはビリーを本当の多重人格だと信じていたのですが、逆に彼の多重人格を信じていない医者、スタッフもいたようです。「患者を信用しない医者がいるなんて！」と、はじめから「ビリーは多重人格なんだ。」と信用しきって読んでいた私は軽く怒りを感じました。

現在でも精神科医は多重人格を重要視しようとする人から、この疾患の存在自体を否定する人まで、様々な反応を示しているようですが、どうやら「複数の人格の同時並行的な存在」という、それまでの精神医学では考えられなかった考えは、次第に認められつつあります。ビリーのように、多重人格で苦しんできた人々が正しい診断を受けられるようになったことが喜ばしいことだと思います。

ビリー・ミリガンという一人の人間は、精神医学の多重人格に対する考えや、自分自身を見つめることなど、最終的には良いこともたらしましたが、そもそも彼がなぜ多重人格者として存在していたのかということをよく考え、覚えておかねばならないと思います。

彼が多重人格者であった二十数年間、彼は他の人格達から眠らされていたため、その間の記憶はありません。その分も埋められるように、これからの人生を有意義なものにしていってもらいたいです。また、彼の絵の才能や、自分のこれまでの経験を生かしての活動に期待しています。

編集後記

学生図書委員長
（制御情報工学科　五年）
若狭晃司

読書というものは人に様々なものを与えてくれます。それは知識や知恵といった生きていくのに必要なことから喜びや悲しみ、怒り憤りなどの感情も与えてくれます。本というものはそれ自体が人生であり読者は人生の一片を読書によって味わうことが出来ます。

私は、読書感想文とは人生をより深く見つめるいい機会だと思っています。今回の読書感想文コンクールでも様々な人生が語られています。その本と出会い、本を読み様々な人生を体験するという行為は非常に尊いものであると言うことが今回のコンクールで改めて感じました。

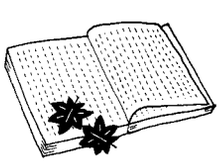
読書というものは人生と先ほど書きましたが私もその人生を味わっている一人です。読書は人生を味わわせてもらい同時に世界を広げる存在だと思っています。将来の日本の産業界を背負って立つ高専生は自ら視野を広め様々な世界を観なければいけないと私は考えています。そのためには読書が一番有効な手だと思います。

読書によって過去の豊富な知識に触れることもいいでしょう。物語の主人公とともに笑い泣き叫ぶのもいいことだと思います。そうすることで新たな視点を得ることが出来人生がまた違ったものに見えるでしょう。私もよくそのように感じます。

本を読む前と読んだ後では人生の見え方が変わってきます。自分の中で本の内容を反芻しそれでも足りなかったらまた読む、そうすることで読書はさらに深みを持ちます。さらに自分の中で反芻するだけでなく読書感想文で自分の感情をぶつけられれば読書によって得られるものがさらに大きくなるでしょう。読書感想文もまた読書の一形態だと思います。

今回の読書感想文コンクールもどれも秀作揃いです。感情に富み、物語の主人公に対して共感や自分と重ね合わせそれを原稿にぶつけたり、少し距離をとり主人公の事を見て冷静な判断を下していたりと様々な視点がありました。入選作品ではないものにも優秀な感想文はありました。感想文を提出した人は読書感想文を書くという神聖な行為を行ってきっと人生に深みが増したでしょう。

本校では一月に読書会というものを開きます。本を読み語り合うという行為もまた読書の一形態だと私は思っています。ぜひともこの「もさく」を読み読書のすばらしさを体験し一月に行われる読書会に参加してください。



「もさく　第三十一号」

発行日　平成十六年一月八日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教官図書委員会

印刷所　三和印刷出版株式会社

住　所　大分市高江西一丁目四三三―二二

電　話　〇九七―五九六―七七〇〇